

第七章 ヘンドン・ホール

翌日、エドワードはマイルズと共に彼の馬に乗りました。

午後には、彼らは小高い丘へとやって来ました。

マイルズは立ち止まり、「ご覧ください、木々に囲まれているあれが私の家です。とても大きな家で、50の部屋と20人の家来がいます」と言いました。

二人は馬に乗って丘を下り、大きな門を通り過ぎました。

「ここがヘンドン・ホールです」とマイルズはうれしそうに言いました。

「我が家に帰ってこられてとてもうれしいです！ 私に会えて家族はとても喜ぶでしょう」

マイルズは家の中へと走って行き、エドワードはマイルズの後について行きました。

長いテーブルに、ブロンドの髪をした一人の若い男がいました。

「ヒュー！」とマイルズは叫びました。

「お前は私に会えてうれしくないのか？ 父上はどこだ？」

その若い男はよそよそしく、冷たいまなざしでマイルズを見ました。

「お前は誰だ？」

「私分からないのか？ お前の兄のマイルズだよ。戦争の後、フランスから戻って来たんだ」

「私の兄はフランスで死んだ」とヒューは言いました。

「私たちは兄の友人から手紙を受け取ったんだ」

「いや、違う。私はここにいる」とマイルズは言いました。

「父上はどこだ？ 父上なら私分かるだろう」

「父上は死んだよ」とヒューは言いました。

「何てことだ！ 気の毒な父上！」とマイルズは叫びました。

「それじゃあ召使いたちを呼べ、彼らなら私分かるだろう」

「召使いたちは皆、新しくなっている」とヒューは言いました。

「貴様、召使いたちを追い払ったのか」とマイルズは怒って叫びました。

「これで分かったぞ。お前は家と金が欲しかったから手紙を書いたんだな。だがお前の企みはうまく行かないさ、エディス嬢が私のことを覚えているだろうからな」

「エディス嬢は、マイルズ・ヘンドンが死んだと知っている」とヒューは言いました。

「彼女は今や、私の妻だ」

マイルズは怒り狂い、部屋を走って横切りました。

「貴様は私の家と土地を奪った。私の金を奪った。そして貴様は、私が愛する女性も奪った。殺してやる！」

マイルズはヒューのシャツをつかみ、怒りながらヒューを壁に押し付けました。

「助けてくれ！ 助けて！」とヒューは叫びました。

召使いたちが部屋の中へ走って来て、マイルズをヒューから引き離しました。

彼らはマイルズとエドワードを牢獄へ連れて行きました。

牢獄はひどい場所でした。

そこは暗くて寒く、ごみごみしていました。

そこら中にネズミがいました。

マイルズとエドワードは、広くて騒々しい部屋で一緒に鎖につながれました。

囚人の中には歌を歌う者もいれば、けんかをしたりわめいたりする者もいました。

一人の男が一人の女を殴って、女を半殺しにしました。

女の顔は血まみれでした。

もう一人の女が、大きな声で泣きました。

「どうしたのだ？」とエドワードは女に尋ねました。

「明日、兵士たちが私を絞首刑にするつもりなのよ、私がチーズをいくらか盗んだからって」と女は泣きながら言いました。

別の悲しげな若者がマイルズに話しかけました。

「あいつらは俺を絞首刑にするつもりなんだ、俺が国王の公園にいるシカを殺したからってな。だがそれは本当の話じゃない」

それから若者は泣き出しました。

「ああ、牢獄は悲しくて醜い場所だ」とエドワードは言いました。

「誰もこれらのかわいそうな人々を助けない。いつか、私はこれらの無情な法を変えようと思う」
その夜は誰も眠りませんでした。

翌日、マイルズとエドワードは裁判官の前にいました。

「この男とこの少年はなぜここにいるのですか？」と裁判官は尋ねました。

マイルズは話したがりましたが、裁判官は「静かに」と言いました。

裁判官はヒューの方に振り返って、「ヘンドンさん、あなたはなぜ二人をここに連れて来たのですか？」と尋ねました。

ヒューは裁判官に自分の話を説明しました。

そのときマイルズが話そうとしましたが、裁判官はマイルズの言うことに耳を傾けませんでした。

「その男はさらし台に2時間、座っていなければならない」と裁判官は言いました。

「そうすれば彼と少年は立ち去ることができる。今すぐ二人を連れて行きなさい」

「違う！」とエドワードは叫びました。

「彼は私の召使いだ。お前は自分が何をしているか分かっていない…」

「少年よ、静かにしなさい、さもないと兵士たちがあなたをぶちますよ」と裁判官は言いました。

兵士たちはマイルズをさらし台にはめました。

人々の中には立ち止まって眺める者もいれば、腐った卵をマイルズに投げつける者もいました。

エドワードはマイルズの前に立ち、マイルズを守ろうとしました。

人々は笑い、「彼は勇気ある少年で、自分のお友達が大好きってわけだ」と言いました。

2時間後、兵士たちはマイルズをさらし台から取り外して、マイルズは自由の身になりました。

マイルズはエドワードを見て、「これで私たちはやっとロンドンに行くことができます」と言いました。